

二〇二五年度卒業論文

親鸞と無礙

L 二二〇〇六九 佐々木利之

目次

序論	1
本論	2
第一章 『仏説無量寿経』における無礙	2
第一節 阿弥陀仏とは	2
第二節 『仏説無量寿経』において使用される無礙	3
第二章 天親・曇鸞における無礙	5
第一節 天親『無量寿経優婆提舍願生偈』における宣言と浄土莊嚴理解の無礙	6
第二節 曇鸞『無量寿経優婆提舍願生偈註』『讚阿弥陀仏偈』における無礙	7
第一項 曇鸞による天親の浄土莊嚴理解の解釈と『往生論註』における無礙理解	7
第二項 曇鸞『讚阿弥陀仏偈』における無礙理解	9
第三章 親鸞における無礙	10
第一節 『教行信証』	10
第二節 「三帖和讃」	17
第三節 『教行信証』・「三帖和讃」以外の「親鸞聖教」	25
結論	25

註

資料

参考文献

序論

親鸞(一一七三～一二六二)は『顕浄土真実教行証文類』(以下『教行信証』)に阿弥陀仏の功德の一つである「無礙」を四五ヶ所多用している。また、『親鸞聖人御消息集』(以下『御消息集』)の第三十一通には以下の様に記されている。

ひとびとの仰せられて候ふ十二光仏の御ことのやう、書きしるしてくだしまゐらせ候ふ。くはしく書きまゐらせ候ふべきやうも候はず。おろおろ書きしるして候ふ。詮ずるところは、無礙光仏と申しまゐらせ候ふことを本とせさせたまふべく候ふ。無礙光仏は、よろづのものにあさましきわるきことにはさはりなく、たすけさせたまはん料に、無礙光仏と申すとしらせたまふべく候ふ。あなかしこ、あなかしこ。」

ここでは、阿弥陀仏の名前として最もふさわしいものは衆生に理解されやすいように選び抜かれた十二光の功德のうちどれに当たるのかという門弟から届けられた質問であると思われる手紙に親鸞が答えており、皆の言う十二光仏について大枠を教えるが、無礙光仏を根本とするが良い。この世界において何においてもこの私を助けようとする、光のような救いを届けているのが阿弥陀仏であり、無量寿仏であり、無礙光仏である。と記している。このことから、真宗教義を構成する上で「無礙」が最も重要であると考えられるが、「無礙」|| 「無礙光」、「無礙光」|| 「無礙光仏」|| 「無量寿仏」と定義づけられている中で、なぜ他の光明を差し置いて唯一「無礙」を強調するのかということが『教行信証』を読み進めていく中で疑問に思ったためである。

本論文では「親鸞思想における無礙がどのようなものなのか」を明確化させることを目的として執筆する。そ

のために第一章では、『仏説無量寿経』（以下『大経』）において使用される無礙について、第二章で親鸞思想に直結する七高僧の無礙解釈について、第三章では親鸞が『大経』、七高僧からどのような影響を受けているのかを研究する。

本論

第一章 『仏説無量寿経』における無礙

第一節 阿弥陀仏とは

阿弥陀仏とは、元来古代インドの言語であるサンスクリット語の *Amitabha*、または *Amitayus* の音を漢字の読み当てはめた言葉で、これを意識した場合において阿弥陀仏は無量寿仏・無量光仏と翻訳されている。先に引用した『御消息集』の十二光仏とは、『大経』において法蔵菩薩が四十八願を興して果てしなく長く一切の衆生には困難な修行の後、阿弥陀仏とられた時に得た異名のうちの十二種のことで、『大経』には以下の様に記されている。

このゆゑに無量寿仏をば、無量光仏・無辺光仏・無礙光仏・無対光仏・焰王光仏・清浄光仏・歡喜光仏・智慧光仏・不断光仏・難思光仏・無称光仏・超日月光仏と号す。~

ここより、これら十二種はすべて阿弥陀仏を意味すると受け取ることができるとしてこの十二光仏から放たれる十二の光明それぞれの功德を讃嘆しているのが、この箇所の前後に記されており、それぞれの光明の功德を基準として類似する項目に振り分けて整理すると、無量光・難思光を「百千万劫においてことごとくともに推算してその寿命の長遠の数を計らんに、窮尽してその限極を知ることあたはじ。」、無辺光・無礙光を「十方諸仏の国土を照耀したまふに、聞えざることなし。」あるいは仏光ありて、百仏世界あるいは千仏世界を照らす。」、無対光・炎王光・超日月光を「無量寿仏の威神光明は、最尊第一なり。諸仏の光明、及ぶことあたはざるところなり。」、清浄光・歡喜光・智慧光を「それ衆生ありて、この光に遇ふものは、三垢消滅し、身意柔軟なり。歡喜踊躍して善心生ず。もし三塗の勤苦の処にありて、この光明を見たてまつれば、みな休息を得てまた苦惱なし。」、不断光を「もし衆生ありて、その光明の威神功德を聞きて、日夜に称説して至心不断なれば、意の所願に随ひて、その国に生ずることを得て、もろもろの菩薩・声聞の大衆のために、ともに歎誉してその功德を称せられん。」、無称光を、「われ、無量寿仏の光明の威神、巍々殊妙なるを説かんに、昼夜一劫すとも、なほいまだ尽すことあたはじ。」というように表現し、これら十二の光明の功德を以って十二の異名を号する仏を『大経』において無量寿仏と総称している。

第二節 『仏説無量寿経』において使用される無礙

この節では『大経』において、無礙と記載のある引文を使用して、『大経』で使用される無礙について四ヶ所

の考察を行う。

まず一つ目に、卷上・発起序・法蔵発願・五十三仏において「如来の正覚は、その智量りがたくして、〔衆生を〕導御するところ多し。慧見無礙にして、よく遏絶することなし。」とあるが、ここでは阿難が釈尊に対して類まれなる美しい姿をされているが、なぜそのような姿をしているのかを問い、釈尊が阿弥陀仏の法を説く準備が整ったとして、如来のさとりのいうのは量ることができないほどに尊い智慧が多く、全ての命あるものたちが尊敬し導かれる所が多い。その智慧が自在で完全なる様はおさえとめられることは無い。と説く一節である。ここからわかる事として、無礙というの**は「智慧。が自在で完全なる様」、つまり森羅万象の膨大な真実・真理を自ら受け入れる能力に欠けるところがない様**をいうことが読み取れる。

次に二つ目、卷上・正宗分・法蔵発願・讚仏偈において、「十方の世尊、智慧無礙にまします。つねにこの尊をして、わが心行を知らしめん。」とあり、ここは法蔵菩薩が世自在王仏の徳を讃える讚仏偈の一部で、東・西・南・北・北東・北西・南東・南西・上方・下方の全ての如来は、真実を見極める働きがまさに非の打ち所が無い。これら一切の如来は、常にこの私が修する修行を見て頂こうと思う。と後に説かれる四十八願を誓う直前の場面であるが、この四句においては法蔵菩薩の修行を世自在王仏のみに誓うのではなく、**十方の諸仏、つまりはさとりを得て真実を見極めることに精通した者すべてにおいてこれを誓っている**ということが分かる。

三つ目、卷上・正宗分・重誓偈において、「仏（世自在王仏）の無礙智のごとく、通達して照らさざることなけん。」とあるが、ここはすでに述べられた四十八願を総合した重誓偈の一部であり、菩薩という仏の前段階に

位置している法蔵菩薩が、世自在王仏の何ものにも妨げられないすべてを見通し照らし尽くす働きのようになるだろう。と既に完全なる仏となった世自在王仏や諸仏の様に自らの行く末をここで表していることが分かる。

四つ目、巻下・正宗分・衆生往生果において、「仏のたまはく、「阿難、それ衆生ありてかの国に生るるものは、みなことごとく三十二相を具足す。智慧成満して深く諸法に入り、要妙を究暢し、神通無礙にして諸根明利なり。」とある。ここでは、釈尊が四十八の願を建立しその願を成就させた阿弥陀仏の国土について、阿難よ、阿弥陀仏国に生まれる者はみな仏の特徴を持った姿になるのだ。智慧が満ち、法を聞き、重要な教えを余すところなく述べ、思うがままに神通力を使って賢く、六根が鋭くなっている。と阿難に説いている一節である。この場合の無礙としては、阿弥陀仏の功德によって、「すぐれた智慧に基礎づけられた自由自在な活動能力」である六神通を付与され、無礙なる活動を行えるようになるということが分かる。

以上第二節に挙げた四ヶ所より『大経』における無礙とは、釈尊においての「智慧が自在で完全なる様」「真実を見極めることに精通している者」「完全なる仏」「思うがままに六神通を扱えること」が無礙として讃嘆され、それにおける共通事項の智慧を象徴していることが分かる。

この章では、親鸞思想の無礙に直接的な影響を与えた七高僧の天親と曇鸞の著書である『無量寿経優婆提舍願生偈』(以下『浄土論』)と『無量寿経優婆提舍願生偈註』(以下『往生論註』)、『讚阿弥陀仏偈』の著書を用いて二祖の無礙に対する理解を考察する。

今回二祖の著書を採択した経緯として、浄土真宗本願寺派総合研究所の聖教データベース『浄土真宗聖典』聖教ダウンロードにて浄土三部経、七祖聖教、親鸞聖教(『教行信証』)の「原文が確認できる無礙を含む単語」を検索した折、巻末の資料のような結果となった。

この表から、天親・曇鸞の無礙に関する記述を親鸞の思想そのものともいえる『教行信証』に天親を三三パーセント、曇鸞を六〇パーセント・七五パーセント引用している点において龍樹・道綽・善導・源信・源空の無礙は、直接的には親鸞思想に反映されていないことが分かり、相対的に天親・曇鸞の無礙思想を研究することとなった。

第一節 天親『無量寿経優婆提舍願生偈』における宣言と浄土莊嚴理解の無礙

まず、『浄土論』とは天親が『大経』に依って自らの願生の意を述べた、二十四行九十六句の偈頌と、三千字たらずの長行で構成されている浄土教における重要な書物の一つである。¹²

「世尊、われ一心に尽十方無礙光如来に帰命したてまつりて、安楽国に生ぜんと願ず。¹³」の総説分において、釈尊よ、私は東・西・南・北・北東・北西・南東・南西・上方・下方を埋め尽くし、何ものにもさえぎられ

ることのない救いを持った光の仏を信じ敬い、阿弥陀仏国に生まれることを願うと天親が述べている部分で、この「尽十方無礙光如来」を分解すると「尽十方」が無礙光如来を修飾する形となっている部分と「無礙光如来（如来〓仏）」の無量寿仏とに分解できる。そして先述の通り「無礙光仏」〓「無量寿仏」であるため「無量寿仏」に帰依するとの解釈が可能である。また、「十二光仏」の中で「尽十方無礙光如来」という名の付し方が阿弥陀如来の功德を最も的確に表す言葉であると天親は認識している事がわかる。

また、同じく総説分の「宮殿・もろもろの楼閣にして、十方を観ること無礙なり。」¹²において、阿弥陀仏国の内部に荘嚴されている建造物の特徴を述べている部分では、阿弥陀仏国に佇む宮殿や様々な高層建造物は東・西・南・北・北東・北西・南東・南西・上方・下方を観ることは何の差しさわりもない。というところから、物質的な遮蔽物がなかったことや、「見る」ではなく「観る」という漢字を用いていることから、視覚的に十方をとらえているというわけではないことが分かる。

以上より、天親は無礙について十方を照らし尽くすという無礙の光を持った如来によって衆生の視覚的無礙とは異なる「差しさわりのない」様であると理解していることが分かる。

第二節 曇鸞『無量寿経優婆提舍願生偈註』『讚阿弥陀仏偈』における無礙

第一項 曇鸞による天親の浄土莊嚴理解の解釈と『往生論註』における無礙理解

天親菩薩、いま、「尽十方無礙光如来」といふは、すなはちこれかの如来の名により、かの如来の光明智相

のごとく讚嘆するなり。ゆゑに知りぬ、この句はこれ讚嘆門なり。¹⁵

ここは、曇鸞が天親の『浄土論』を註解している『往生論註』に記した総説分・作願門・願生問答の部分で、「世尊我一心 歸命盡十方 無導光如來 願生安樂國¹⁶」をより詳しく註解する一節であり、本論文の前節で述べた解釈に記載している筆者の解釈に口に仏名を称えて阿弥陀仏の功德をたたえる五念門の讚嘆門に値すると加えたものである。また、巻下・解義分・起觀生信章・名号破滿・二不知三不信において、

「かの如來の光明智相のごとく」とは、仏の光明はこれ智慧の相なり。この光明は十方世界を照らしたまふに障礙あることなし。よく十方衆生の無明の黒闇を除くこと、日・月・珠光のただ空穴のなかの闇をのみ破するがごときにはあらず。¹⁷

というところから、如來から放たれる光明は智慧そのものの姿であり、衆生の闇を破すると言っても、日光や月光、美しい光によって照らされて明るくなるような闇のことを言っているのではないと誤解を避ける基準を設けた。前節では、「名の付し方が阿弥陀如來の功德を最も的確に表す言葉である」としたが、これを曇鸞は「二十四行九十六句の偈頌（詩句）」であることと、「天親の阿弥陀如來への信仰の厚さ」を基に五念門における讚嘆門であるとして、無礙理解の立場としては『浄土論』を註解しているということから天親と同じであるということと、無礙の異義を是正する基準及び、この「尽十方無礙光如來」のあり方について新たな見解を提示しているということがわかる。

また、巻下・解義分・利行満足章においては、

いま「速やかに阿耨多羅三藐三菩提を得」といふは、これ早く作仏することを得るなり。：統べてこれを訳して、名づけて「無上正遍道」となす。：「道」とは無礙道なり。『經』（華嚴經・意）にのたまはく、「十方の無礙人、一道より生死を出づ」と。「一道」とは一無礙道なり。「無礙」とは、いはく、生死すなはちこれ涅槃と知るなり。かくのごとき等の入不二の法門は、無礙の相なり。：。

とあり、ここでは天親の『浄土論』の長行において菩薩が阿耨多羅三藐三菩提を得ているから自利利他の教化をしているという文章に対し、曇鸞がこの阿耨多羅三藐三菩提を細分化した上でそれを「無上正遍道」と名付け、その道を何ものにも妨げられない道と解釈している部分である。ここから、曇鸞の無礙の理解として、『華嚴經』に記されている釈尊のさとられた縁起の真理に基づいた涅槃という成道は無礙の道として、衆生の不変の真理である「生死」は何ものにも妨げられることは無いということが理解できる。

第二項 曇鸞の『讚阿弥陀仏偈』における無礙理解

「光雲無礙にして虚空のごとし。ゆゑに仏をまた無礙光と号けたてまつる。一切の有礙光沢を蒙る。このゆゑに難思議を頂礼したてまつる。」¹⁶では、曇鸞が『大經』によって阿弥陀仏の十二光の一種である無礙光とその無礙なる様を表わした難思議の肝要を七言一句にまとめた『讚阿弥陀仏偈』・仏莊嚴の一節である。この偈頌より、阿弥陀仏の光明は日光や月光の光を遮るはずの雲という障害物に譬え、何のさわりもなく一直線に衆生へと届いているという功德を讚嘆しているということが分かる。また、その無礙の光明に対する譬喩をもって「日光

は雲に遮られる」という我々の認識する常識の範疇を逸脱していて量ることすらままならない様を難思議という言葉で表現している。

以上より、曇鸞は天親と同じ無礙理解の立場として論主を支持し、そこからさらに「尽十方無礙光如来」を展览展示させた「五念門における讚嘆門」であるとし、何ものにも妨げられることの無い、常識の範疇を逸脱して量ることすらままならないものであると理解している。

第三章 親鸞における無礙

この章では、親鸞の主著である『教行信証』の御自釈や「三帖和讃」をはじめ、親鸞の著作における無礙に相当する部分を節ごとに取り上げ、その著作においてどのようなことを根拠に何を無礙としているのかを考察したうえで、親鸞思想に直接アプローチしていく。まず第一節に『教行信証』を考察し、第二節において「三帖和讃」を考察し、第三節において『教行信証』と「三帖和讃」以外の著作に記載される内容をもとに考察をしていく。また、第一節・第二節ではそれぞれ取り上げた内容について様々な論文・書籍著者の意見を交えながら明確な根拠を模索するものとする。そして第三節においては『教行信証』と「三帖和讃」を除く「親鸞聖教」で無礙に関する記述を取り上げ、無礙の意味の総仕上げを行う。

第一節 『教行信証』

まず一つ目は、『教行信証』「行巻」の大行釈・称名破満であるが、

しかれば名を称するに、よく衆生の一切の無明を破し、よく衆生の一切の志願を満てたまふ。称名はすなはちこれ最勝真妙の正業なり。正業はすなはちこれ念仏なり。念仏はすなはちこれ南無阿弥陀仏なり。南無阿弥陀仏はすなはちこれ正念なりと、知るべしと。²⁰

この称名破満に対し、大きく分けて二通りの解釈の方法が存在する。まず一つには伝統宗学に基づいた解釈で、この解釈を内藤知康氏は支持している。内藤氏は曇鸞の『往生論註』を論拠²¹としたもので、「しかれば：志願を満てたまふ」を称名破満とし、「称名：」以下が破満する称名が正業・念仏・南無阿弥陀仏・正念に転釈されているとし、親鸞は曇鸞の言う「如実修行相應」という信心の伴った称名、「信具の称名」であると領解している。²²

しかし、二つ目の解釈として、現代の新しい解釈が存在し、「称名」に関して内藤氏の論文にも引用されている岡亮二氏の『教行信証 口述五〇講』には、『往生論註』では「称名」が無明を破るのではなく「名号」が破るとなっていて、その条件に「真実信心」が必須としており、その「真実信心」が無い場合を「不如実修行（二不知）・与名義不相応（三不信）」としている。しかし御自釈の中で親鸞は曇鸞理解（二知三心の称名）とは真逆の存在である不如実修行（二不知）・与名義不相応（三不心）の称名で無明が破れないとは書いていないと示している。また親鸞はその前提にあるものとして「煩惱」が二知三心を成就させる上での障壁となり、根本の原因であるとしていることを考察している。²³これに付随して、玉木興慈氏は親鸞の称名破満（二不知・三不心の称

名)と曇鸞の名号破満(二知・三心の称名)の検証において、「親鸞は煩惱によって二知・三信にならないから無明を破れないことを示そうとしたと考えるべき」と考察している。²⁴この場合、内藤氏の解釈と岡氏・玉木氏の解釈とで称名への煩惱の干渉に関して考慮しているか否かの相違が発生しているが、私は後者の煩惱による二知・三信への干渉が二不知・三不信を生じさせていると考える。確かに、曇鸞の言う二知・三心が順調に進み真実信心の伴った称名を行ずることが出来るのであれば、全く問題ではないと私も考えるが、親鸞の生涯において煩惱を断ずることのできない愚かさ、正信念仏偈の「已能雖破无明闇 貪愛瞋憎之雲霧 常覆眞實信心天²⁵」を振り返ってみれば、煩惱が常に存在していると記されており、煩惱による干渉によって真実信心の具わった称名を行ずることが出来ないということに何の不思議もない。

つまり、称名Ⅱ正業Ⅱ念仏Ⅱ南無阿弥陀仏Ⅱ正念Ⅱ信心とする阿弥陀仏の名号を称えることは衆生の煩惱を打ち破り、衆生の浄土願生の願いを成就させる行であると示され、煩惱という根源的な障壁によって自ら無明を破ることは出来ないということを表し、この称名破満積の表題ともいえる出体出願にも、

つつしんで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とはすなはち無礙光如来の名を称するなり。

この行はすなはちこれももろの善法を撰し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。ゆゑに大行と名づく。²⁶

とあるようにもろもろの善法と徳本が含まれた阿弥陀仏の行を私たちへ向けて回向しているとなる。すなわちこの阿弥陀仏の行が衆生の無明を破り、衆生の一切の志願を満たすといえる。そしてここから、「称名」として現

れた名号のはたらきは、煩惱をもつともせず衆生にはたらくことが「無礙」であると親鸞は理解し述べていることが分かる。

そして二つ目に、「行巻」の他力積を見る。

他力といふは如来の本願力なり。

『論』（論註・下 一五三）にいはく、「へ本願力」といふは、大菩薩、法身のなかにして、つねに三昧にましまして、種々の身、種々の神通、種々の説法を現じたまふことを示す。みな本願力より起るをもつてなり。：

：へ菩薩はかくのごとき五門の行を修して、自利利他して、速やかに阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得たまへるがゆゑに」と。仏の所得の法を、名づけて阿耨多羅三藐三菩提とす。この菩提を得たまへるをもつてのゆゑに、名づけて仏とす。いまへ速得阿耨多羅三藐三菩提」といへるは、これはやく仏になることを得たまへるなり。：統ねてこれを訳して、名づけてへ無上正遍道」とす。：へ道は無礙道なり。『經』（華

嚴經）にいはく、へ十方の無礙人、一道より生死を出でたまへり」と。へ道は、一無礙道なり。へ無礙は、いはく、生死すなはちこれ涅槃なりと知るなり。かくのごときらの入不二の法門は無礙の相なり。²⁷

ここでは、「他力と言うは如来の本願力なり。」のみが親鸞の言葉で、そのあとには曇鸞の『往生論註』における「本願力」²⁸と「阿耨多羅三藐三菩提」²⁹の領解が記されている。つまりここで親鸞は天親と曇鸞をそのまま引用する形で「他力＝本願力」であることを記している。そしてこの曇鸞の本願力の波線部に対して藤嶽明信氏

と隴弘信氏は、大菩薩がさとりににおいて、常に禪定で、さまざまな応化身や神通力を現し、説法をすることというのは、この文脈から考えれば、本願力を回向しているのは如来因位の法蔵菩薩を意味していると理解している。³⁰但し、隴氏は「大菩薩」について浄土の大菩薩主体のはたらきという領解と、大菩薩が法蔵菩薩を使役しているはたらきというこれまでの領解二種について「宗学という首枷に縛られた理解に過ぎず、解釈として適さない。」と、この領解に難色を示した。³¹

以上の藤嶽氏と隴氏の領解から、親鸞と曇鸞の言う「本願力」は法蔵菩薩がさとりをひらいた状態で自身の姿を様々に変化させ、自在に神通力を操り、様々な説法をする力のことを言うことが分かる。また若林氏は、太線部の「阿耨多羅三藐三菩提」について「阿耨多羅三藐三菩提を訳して無上正遍道という。無上正遍道とは極楽へまいる大乘の仏道であると私は理解している。」と示した。³²

以上の藤嶽氏・隴氏・若林氏の考察から推測するに、法蔵菩薩が「阿耨多羅三藐三菩提」という「無上正遍道」を完成させ、その道を法蔵菩薩が有する力（本願力）によって「悟りへの無礙の道」、「生死とは涅槃」、「これこそ唯一の法門」であると親鸞は示して、阿弥陀仏が法蔵菩薩であったころから煩惱具足の凡夫である我々へ「本願力」という「他力」無礙のはたらきによって「阿耨多羅三藐三菩提」無上正遍道を勧めていると親鸞は理解しているといえる。

三つ目は、「行巻」一乗海釈・一乗嘆徳を見る。

弘誓一乗海は、無礙無辺最勝深妙不可説不可称不可思議の至徳を成就したまへり。なにをもつてのゆゑに。

誓願不可思議なるがゆゑに。悲願は：なほ疾風のごとし、よく一切諸障の霧を散ずるがゆゑに。：なほ大風のごとし、あまねく世間に行ぜしめて礙ふるところなきがゆゑに。よく三有繫縛の城を出して、よく二十五有の門を閉づ。よく眞実報土を得しめ、よく邪正の道路を弁ず。：³³

ここでは、本願による他力念仏往生の法門は無上の徳が具わっており、その根拠として誓願が思い量ることが出来ない程に優れているためである。本願とは（『四十八願』本願第十八願）まるで疾風のようなだ。煩惱の霧を散らすからだ。またまるで大きな風のようなだ。すべての世界に風を巻き起こし、どこまでも進んでゆくからだ。欲界・色界・無色界の縛りから出させて、輪廻の道を差し止め、浄土へと生まれさせて、正しき道を教えている。と述べられており、本願の無限性とその功德の譬喩を二八種顕した部分であるが、本願の功德の一部として取り上げた先の筆者の解釈は無礙の意味を包含していることは明らかである。しかしながら、この二八喩に対しての研究は調べる限り星野元豊氏の『講解『教行信証』教の巻・行の巻』以外では進められておらず、三明智明氏も二八喩に関して別の機会に考察するとしている。³⁴

一方、高原覚正氏は「この一乗海讃嘆につづいて、『華嚴経』の「入法界品」の二百二十一喩より、二十八喩を引いて、本願をたたえられている。³⁵」としている。しかし、『註釈版』や『浄土眞宗聖典全書』の対応している箇所³⁶には『華嚴経』の引文であると明記されている箇所は見受けられず、親鸞自身がこの部分に対して『華嚴経』に依っていることを記していないことから、『華嚴経』の二百二十一喩を検討するのは根拠としては不十分であると筆者は考える。つまり、ここでは星野氏と筆者の解釈に依らざるを得ないといえよう。星野氏

は二八喩の無礙の性質を持った二種の譬喩について、「…弥陀大悲の誓願は…また疾風のようにである。よく一切衆生のもろもろの障りの霧を吹き散らかすからである。…また大風のようにである。あまねく世間に吹きわたって尋えられるところがないからである。…³⁷」と解釈を施している。

四つ目に、「信巻」三二問答・大信嘆徳を見る。

おほよそ大信海を案ずれば、貴賤縊素を簡ばず、男女老少をいはず、造罪の多少を問はず、修行の久近を論ぜず、行にあらず善にあらず、頓にあらず漸にあらず、定にあらず散にあらず、正観にあらず邪観にあらず、有念にあらず無念にあらず、尋常にあらず臨終にあらず、多念にあらず一念にあらず、ただこれ不可思議不可称不可説の信樂なり。たとへば阿伽陀薬のよく一切の毒を滅するがごとし。如来誓願の薬はよく智愚の毒を滅するなり。³⁸

ここは、阿弥陀仏の信心の功德に満ちた海のように大きな救いに想いを巡らしてみると、私たち衆生が身勝手に決めた分別をもとせず、ただ考え及ばず、言葉にできず、説き尽くすこともできないという慶びがある。譬えるなら、不老不死の妙薬がどんな毒も解毒するようだ。阿弥陀仏の誓願という薬は、煩惱という毒の盛りを抑え、機能を停止させてくださる。というように親鸞が阿弥陀仏の誓願を讃嘆している一節で、玉木氏はこの御自釈に対して「弥陀の救いは一切の悪業煩惱に妨げられることなく、その救いが完徹することを「無礙」³⁹」としている。

このことから「私たち衆生が身勝手に決めた分別」というのは阿弥陀仏の救済にとって何の妨げにもならない

という無礙を「不老不死の妙薬」と譬えていることが分かる。また、玉木氏はこの場合の無礙の内容について具体的に記されたものとして『唯信鈔文意』を引用している。

「罪根深」といふは、十悪・五逆の悪人、謗法・闡提の罪人、おほよそ善根すくなきもの、悪業おほきもの、善心あさきもの、悪心ふかきもの、かやうのあさましきさまざまの罪ふかきひとを「深」といふ、ふかしといふことばなり。すべてよきひとあしきひと、たふときひといやしきひとを、無礙光仏の御ちかひにはきははずえらばれず、これをみちびきたまふをさきとしむねとするなり。㊦

ここでは、仏教において指定する悪や如来の意に適わない悪などの愚かな罪人を「深」つまりは罪深いと言えるが、すべての善悪の人、貴賤を問わず救って下さる無礙光仏の勧めを肝要とする。というように「よきひと、あしきひと、たふときひと、いやしきひと」を簡ばずに導いてくださると示されるとしてゐる。

第二節 「三帖和讃」

この節では、前節に述べた御自釈の考察に基づいて「三帖和讃」において無礙に相当するものを取り上げ、その和讃の示す本意を考察する。また、この「三帖和讃」は『教行信証』を中心に、「異なった表現を用いて造られた著作」と位置付けることが出来る。比喩的に言えば、樹木から派生した枝葉の様に捉えることが可能で、『教行信証』という大きな樹木を構成する枝葉がこの著作なのではないのだろうかという観点から、注目箇所の考察の中で『教行信証』を中心に立ち返り、和讃を制作するにあたって使用されたと思われる文章を用いて考察

を深めていく。

① 無明の闇を破するゆゑ 智慧光仏となづけたり 一切諸仏・三乗衆 ともに嘆誉したまへり⁴²

② 一切の功德にすぐれたる 南無阿弥陀仏をとふれば 三世の重障みなながら かならず転じて軽微なり

43

③ 無礙光如来の名号と かの光明智相とは 無明長夜の闇を破し 衆生の志願をみてたまふ⁴⁴

ここに挙げたこの三首の和讃は、前節の「称名破満積」の解釈を表わすために作られた和讃と考えられる。ここでは、阿弥陀仏の名号を表わす「無明の闇を破する」「南無阿弥陀仏をとふ」「無礙光如来の名号・無明長夜の闇を破し」の作用（称名）によって「三世の重障・転じて軽微なり」「衆生の志願をみてたまふ」と述べられており、**名号を称えるという阿弥陀如来の行が煩惱に対して無礙のはたらきとなって煩惱を打ち破り、阿弥陀仏の本願の救済が衆生に向けられていることがうかがえる。**

これらの和讃の出典になった部分として『教行信証』に立ち返ると、①では「真仏土巻」真仏土積の引文で曇鸞『讚阿弥陀仏偈』仏莊嚴の「仏光よく無明の闇を破す、ゆゑに仏をまた智慧光と号す。一切諸仏・三乗衆、ことごとくともに嘆誉す、⁴⁵」が出典として考えられ、阿弥陀仏の数多くの功德の一部である「十二光」の智慧光を讃嘆する箇所として親鸞が引用したものである。②では「化身土巻」真門積・説意出願の御自釈で、

善本とは如来の嘉名なり。この嘉名は万善円備せり、一切善法の本なり。ゆゑに善本といふなり。徳本とは如来の徳号なり。この徳号は一声称念するに、至徳成満し衆禍みな転ず、十方三世の徳号の本なり。ゆゑに

徳本といふなり。⁴⁵⁾

が出典と考えられ、阿弥陀仏の名号の本質とはいったい何なのかを『仏説阿弥陀経』に説かれる真門で解釈したものである。③では「信巻」大信釈・曇鸞『往生論註』で、

〈称彼如来名〉といふは、いはく無礙光如来の名を称するなり。〈如彼如来光明智相〉といふは、仏の光明はこれ智慧の相なり。この光明、十方世界を照らすに障礙あることなし。よく十方衆生の無明の黒闇を除く。日・月・珠光のただ室穴のうちの闇を破するがごときにはあらざるなり。〈如彼名義欲如実修行相応〉といふは、かの無礙光如来の名号は、よく衆生の一切の無明を破す、よく衆生の一切の志願を満てたまふ。

47

が出典として考えられ、前節で述べた「称名が無明を破る」ということがいえる。また、この三箇所は『教行信証』で「称名破満」を解釈するにあたって読む必要のある部分に対応しているといえる。親鸞の解釈としてこれを見るならば、十方を照らし尽くす無礙光如来の名号を称えることによって衆生の煩惱をすべて破ることは出来ないが、そもそもその名号は嘉名という一切の功德が具わった仏の名前であるため、たった一回の称名念仏であってもその称名は効果を發揮し、阿弥陀仏の浄土に往生してさとりを開きたいと願う心を満たす。そのような智慧の光の如来を信じ敬い、深く敬意を表す。と受け止めているといえる。

また、黒田覚忍氏は「無明」について二通りの解釈があると示しており、一つは「ものをありのままに見る智慧が無い（痴無明）」ということと、もう一つは「阿弥陀仏の本願を疑うことを無明（疑無明）」として解釈し、

①の和讃において、親鸞は後者の「阿弥陀仏の本願を疑うことを無明」という意味合いで使用していると記している。⁵⁰そして、阿弥陀仏を究極の拠り所として自らに知らされた時に痴無明が晴れ、阿弥陀仏の本願を疑いなく信じることのできる他力の信心が恵まれた時、その信心を得ると同時に無明の闇（疑無明）が破られると解釈している。⁵¹しかし梯實圓氏は「無明」について、これまでの先行研究の中で解釈が分かれており、それに応じて衆生の志願の意味が変わるとして、第一に「無知の煩惱すべてを破り、往生成仏を成就させる（痴無明）解釈」、第二に「本願を疑うことを無明としてそれを破り、信心を獲得する真宗独自の（疑無明）解釈」、第三に「無知の煩惱を功德へと変化させ、往生成仏を成就させる（無明煩惱）解釈（第一の「阿弥陀仏側の法徳の目線」と第二の「救われる側の目線」の解釈を合わせた、痴無明を破り疑無明を破るという相互関係を表わす「痴無明疑無明併存説」）の三つがあると示し、親鸞は衆生に常に煩惱があるということを「正信念仏偈」に顕していることから「本願を疑うことを無明」としてしていると記している。⁵⁰

- ① 光雲無礙如虚空 一切の有礙にさはりなし 光沢かぶらぬものぞなき 難思議を帰命せよ⁵¹
- ② 本願力にあひぬれば むなしくすぐるひとぞなき 功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし⁵²
- ③ 本願円頓一乗は 逆悪撰すと信知して 煩惱・菩提体無二と すみやかにとくさとらしむ⁵³
- ④ 煩惱にまなこさへられて 撰取の光明みざれども 大悲ものうきことなくて つねにわが身をてらすなり⁵⁴
- ⑤ 無明長夜の灯炬なり 智眼くらしとかなしむな 生死大海の船筏なり 罪障おもしとなげかざれ⁵⁵
- ⑥ 願力無窮にましませば 罪業深重もおもからず 仏智無辺にましませば 散乱放逸もすてられず⁵⁶

ここに挙げたこの六首の和讃は、前節に筆者が述べた「他力積」「一乗海積・一乗嘆徳」の解釈を表わすために作られた和讃と考えられる。本願力⇨他力となる「光雲」「功德の宝海」「本願円頓一乗」「撰取の光明・大悲」「無明長夜の灯炬・生死大海の船筏」「願力無窮」、これらが無礙の道となる「一切の有礙にさはりなし」「煩惱の濁水」「すみやかにとく」「つねにわが身を照らす」「罪業深重もおもからず」「散乱放逸もすてられず」となっていて、**本願力と言う他力が阿耨多羅三藐三菩提⇨無上正遍道となって煩惱に妨げられること無く、さとりを開くことのできる他力の教法を無礙としていることがうかがえる。**

これらの出典となった部分として『教行信証』に立ち返ると、㊦の和讃は「信卷」真仏土積引文の曇鸞『讚阿彌陀仏偈』仏莊嚴の、

光、雲のごとくにして無礙なること虚空のごとし、ゆゑに仏をまた無礙光と号す。一切の有礙光沢を蒙る、

このゆゑに難思議を頂礼したてまつる。⁵⁷

が出典として考えられ、無礙光の一切に障りがない様を言っているといえる。㊦の和讃は『教行信証』への引用が散見される天親『浄土論』総説分の「仏の本願力を観ずるに、遇ひて空しく過ぐるものなし。よくすみやかに功德の大宝海を満足せしむ。⁵⁸」が考えられ、仏の本願力は自分自身に向けられており、間を置くことなくこの身に功德を満たすことがいわれている。㊧の和讃は『教行信証』「信卷」大信積の引文に引用されている源信

『往生要集』専修念仏・観察門・雑略観の「煩惱、眼を障へて、見たてまつることあたはずといへども、大悲倦むことなくして、つねにわが身を照らしたまふ。⁵⁹」が出典と考えられ、煩惱によって真実を見ることが出来な

い衆生に阿弥陀仏の大悲は常にこの身に届いていることを表しているといえる。

③⑤⑥の和讃は親鸞の著作に明確な出典は見られず、様々な出典をもとに構成されたものであるということが考えられるが、③の和讃の出典について北塔光昇氏は曇鸞の発輝である本願他力を顕したのは『往生論註』であるが、「円頓」と「一乗」の言葉は載っておらず、親鸞は『教行信証』「行巻」の

慈雲遵式なりの讃にいはいはく、「了義のなかの了義なり。円頓のなかの円頓なり」と。(以上)

大智「元照律師なり」唱へていはいはく(元照観経義疏)、「円頓一乗なり。純一にして雑なし」と。(以上)。
によって解釈したと述べており⁶²、阿弥陀仏の本願こそが円頓という完全なさとの境地へと至る一乗の教法であると示していることが分かる。また、⑤⑥の和讃の出典について高木昭良氏は

：(⑤の和讃)は『西域記』巻六に「生死の大海に誰か舟筏と作らん、無明の長夜に誰か燈炬と為らん。」とあるのを、聖覚法印が『本尊色紙文』に「誠に知んぬ、無明長夜の大燈炬なり、何ぞ智眼の暗きを悲しまん。生死大海の船筏なり、豈に業障の重きを煩はん。」とのべられたものによったもの。

：(⑥の和讃)は聖覚法印の『唯心抄』の「仏力無窮なり、罪障深重のみをおもしとせず。仏智無辺なり、散乱放逸のものおもすつることなし。たゞ信心を要とす、そのほかおぼかえりみざるなり。」によったもの。

と述べており⁶²、二首に共通して生死大海の海を渡す船のような阿弥陀仏の誓願の不可思議を述べている。

これらのことから親鸞の解釈として見るならば、**阿弥陀仏の本願という力用は、煩惱にまみれて一切の事象の**

眞実を見抜くことが出来ない愚かな一切衆生をさとりにへの妨げとなるものを持ったままにさとりにへと至らせることのできる無礙で唯一の教法であるといえる。

① 解脱の光輪きはもなし 光触かぶるものはみな 有無をはなるとのべたまふ 平等覺に歸命せよ⁶²

② 弥陀の大悲ふかければ 仏智の不思議をあらはして 変成男子の願をたて 女人成仏ちかひたり⁶³

③ 男女貴賤ことごとく 弥陀の名称するに 行住座臥もえらばれず 時処諸縁もさはりなし⁶⁴

④ 源空光明はなたしめ 門徒につねにみせしめき 賢哲・愚夫もえらばれず 豪貴・鄙賤もへだてなし⁶⁵

ここに挙げたこの四首の和讃は、前節に筆者が述べた「三一問答・大信嘆徳」解釈を表わすために作られた和讃と考えられる。人間の文明発展におけるそれぞれの事象に対する境界線及びその差別化に対し「有無をはなる」「女人成仏をちかひ」「男女貴賤ことごとく・行住坐臥もえらばれず・時処諸縁もさはりなし」「賢哲・愚夫もえらばれず」「豪貴・鄙賤もへだてなし」としてわれわれ衆生が自己中心的に分別した境界線をものともせず、「平等覺」「変成男子の願をたて」「弥陀の名称するに」というように一切衆生を差別や分別をせずに漏れなく救うという無礙の救いを大いなる信心の海と表わされていることがうかがえる。これらの出典となった部分とし

て『教行信証』に立ち返ると、①の和讃は「真仏土巻」真仏土釈引文の曇鸞『讚阿弥陀仏偈』にある、

解脱の光輪限齊なし、ゆゑに仏をまた無辺光と号す。光触を蒙るもの有無を離る、このゆゑに平等覺を稽首したてまつる。⁶⁶

が考えられ、阿弥陀仏の光明の救いは末端が無く、その光に包まれる者たちは有見無見という物事の存在を認知

する誤った見かたを離れるように教化されることが言われ、末端のない光明によってその光を被らない者たちがいないことを表している。㊦の和讃は『大経』の第三五願で以下に説かれているように、

たとひわれ仏を得たらんに、十方無量不可思議の諸仏世界に、それ女人ありて、わが名字を聞きて、歎喜信樂し、菩提心を発して、女身を厭悪せん。寿終りてののちに、また女像とならば、正覚を取らじ。㊧

を出典としていると考えられ、阿弥陀仏の大悲が釈尊在世当時の「五障三障説」に充てられていた女人でさえも救うと誓われたことが言われている。㊨の和讃は源信『往生要集』卷下・念仏証拠の「男女・貴賤、行住坐臥を簡ばず、時処諸縁を論ぜずして、⁶⁹」が出典として考えられ、往生に際し念仏を行とする証拠が男女を問わず、貴賤を問わず、行住坐臥を問わず、時処諸縁を問わない行であることが言われている。㊩の和讃は㊦と同様に『往生要集』の文に依って制作されたことと、親鸞が法然門下であったころの主観が混ざり合ったものであると考えられる。「智慧光のちからより 本師源空あらはれて…⁷⁰」と親鸞が記したように、法然を阿弥陀仏の光明のような一切平等の精神がもととなって「賢哲・愚夫もえらばれず 豪貴・鄙賤もへだてなし」の心を読んだともいえる。これらのことから親鸞の解釈を見るならば、阿弥陀仏の一切衆生を救いたいという大いなる慈悲が本願の力用である他力の中の念仏という行を通して衆生の煩惱や往生への障害をもともせず届いているといえる。

以上のことから、「三帖和讃」における無礙についてまとめると、「阿弥陀如来の行が煩惱に遮られず煩惱を破って志願を満たす」・「五濁の世に唯一で本願他力の教法は何ものにも妨害されない」・「一切衆生を差別や分別な

く救う」ことを無礙とされているといえる。

第三節 『教行信証』・「三帖和讃」以外の「親鸞聖教」

この節では『浄土文類聚鈔』『愚禿鈔』『尊号真像銘文』『一念多念文意』『唯信鈔文意』『弥陀如来名号徳』のそれぞれから無礙を表現する中で重要な個所を一点づつ取り上げ、親鸞における無礙の総合的整理を行う。また、ここでも前節の冒頭で述べた様な「親鸞の著作の位置づけ」を念頭に置きながら考察するべきではあるが、頁数の制限に伴いこれを註に記す。こ

結論

今回作成した論文において研究目標とした項目を振り返ってみると、「親鸞思想における無礙がどのようなものか」を明確化させることである。これまで挙げた第一章から第三章までの『大経』、天親『浄土論』、曇鸞『往生論註』、親鸞『教行信証』『三帖和讃』『親鸞聖教』の無礙を整理すると、第一章の『大経』では釈尊・阿弥陀仏において「智慧が自在で完全なる様」「真実を見極めることに精通している者」「完全なる仏」「思うままに六神通を扱えること」としている。

次に第二章では、天親は無礙を十方を照らし尽くすという無礙の光を持った如来によって衆生の視覚的無礙とは異なる「差しさわりのない」様であると理解しており、曇鸞は天親の解釈に根拠として無礙の定義を付随させ、二祖の見解として「差しさわりのない」「生死」「人知を超えたもの」としている。

そして、第三章において親鸞は、無礙を「無上正遍道」「煩惱をもとせず衆生にはたらくもの」「阿弥陀仏の行が煩惱に遮られない」「一切衆生を差別や分別なく救う」「救われざる者であってもその障害を通り抜けて救済の手を差し伸べている」と理解している。

これらのことから、我々衆生にとって本来妨げとなるような物事だけにとどまらず、衆生の根源的な煩惱を透過した上で衆生を救済し、その救済していく間において妨げられるものがない様を無礙としていることがいえる。

註

1 『註釈版』七九三頁～七九四頁

2 『註釈版』二九頁

3 『註釈版』二九頁～三一頁

4 補足情報；『註釈版』三七〇頁憬興師のいはく（『無量寿経連義述文賛』）、：清浄光仏、「無貪の善根よりして現ずるがゆゑに、また衆生の貪濁の心を除くなり。貪濁の心なきがゆゑに清浄といふ。」歎喜光仏、「無瞋の善根よりして生ずるがゆゑに、よく衆生の瞋恚盛心を除くがゆゑに。」智慧光仏、「無痴の善根の心より起れり。また衆生の無明品心を除くがゆゑに。」：〔以上抄要〕

5 『註釈版』九頁

6 『岩波仏教辞典』五六一頁参照。―仏教の無上の道理を洞察する強靱な認識の力―

7 『註釈版』一三頁

8 『註釈版』二五頁

9 『註釈版』四八頁

10 『註釈版』一五五二頁

① 神足通。欲するところに自由に現れることのできる能力。② 天眼通。世間のすべてを見通す力。また、衆生の未来を予知する能力。③ 天耳通。世間一切の苦楽の言葉、遠近の一切の音を聞くことが出来る能力。④ 他心通他人の考えていることを知る能力。⑤ 宿命通自己や他人の過去のありさまを知る能力。⑥ 漏尽通。煩惱を滅尽させる智慧。

11 [浄土真宗聖典・浄土真宗本願寺派総合研究所](#)（最終アクセス二〇二五年一〇月二七日）

12 『七祖篇（註釈版）』二八頁参照。

13 『七祖篇（註釈版）』二九頁

14 『七祖篇（註釈版）』三〇頁

- 15 『七祖篇（註釈版）』五四頁
- 16 『浄土真宗聖典全書』一 三經七祖篇、四三三頁
- 17 『七祖篇（註釈版）』一〇三頁
- 18 『七祖篇（註釈版）』一五四頁、一五五頁
- 19 『註釈版』三六二頁『七祖篇（註釈版）』一六二頁
- 20 『註釈版』一四六頁
- 21 『七祖篇（註釈版）』一〇三頁
- 22 内藤知康「『行文類』称名破満积の解釈について」二六頁参照。
- 23 岡亮二『教行信証 口述五〇講』一三八頁参照。
- 24 玉木興慈『『教行信証』行巻の行―称名破満积を中心に―』八四頁参照。
- 25 『浄土真宗聖典全書』二 六一頁
- 26 『註釈版』一四一頁
- 27 『註釈版』一九〇、一九二頁
- 28 『七祖篇（註釈版）』一五三頁
- 29 『七祖篇（註釈版）』一五四、一五五頁
- 30 藤嶽明信「他力と言うは本願力なり」一二頁、鑪弘信「大行とその源泉―『行巻』他力积の考察―」一六頁、
一八頁参照。
- 31 鑪弘信「大行とその源泉―『行巻』他力积の考察―」一七頁参照。
- 32 若林信受「阿耨多羅三藐三菩提について」二六頁
- 33 『註釈版』二〇〇、二〇一頁
- 34 三明智明「親鸞の『教行信証』における誓願一仏乗の開顯―その経文証『涅槃経』・『華嚴経』の文について
の「考察」―」一一頁参照。

- 35 高原覚証『歎異抄集記』[歎異抄集記（中巻）](#) 高原覚正著、「註、第十章」（最終アクセス二〇二五年十二月六日）※書籍状態のものが無く頁数不明の為、リンクと目次を記載。
- 36 『註釈版』二〇〇頁、『浄土真宗聖典全書』五八頁
- 37 星野元豊『講解『教行信証』』三九六頁～三九八頁参照。
- 38 『註釈版』二四五頁～二四六頁
- 39 玉木興慈「親鸞思想における無礙の意味」二九頁参照。
- 40 『註釈版』七〇六頁～七〇七頁
- 41 玉木興慈「親鸞思想における無礙の意味」二八頁～二九頁参照。
- 42 『註釈版』五五八頁（『浄土和讃』讚阿弥陀仏偈和讃、一首）
- 43 『註釈版』五七四頁（『浄土和讃』現世利益和讃、九八首）
- 44 『註釈版』五八六頁（『高僧和讃』曇鸞讚、四七首）
- 45 『註釈版』三六二頁、『七祖篇（註釈版）』一六三頁
- 46 『註釈版』三九九頁
- 47 『註釈版』二一四頁、『七祖篇（註釈版）』一〇三頁
- 48 黒田覚忍『聖典セミナー』『浄土和讃』五〇頁参照。
- 49 黒田覚忍『聖典セミナー』『浄土和讃』五二頁参照。
- 50 梯實圓『聖典セミナー』『教行信証』教行の巻』二〇三頁～二一〇頁参照。
- 51 『註釈版』五五七頁（『浄土和讃』讚阿弥陀仏偈和讃、六首）
- 52 『註釈版』五八〇頁（『高僧和讃』天親讚、一首）
- 53 『註釈版』五八四頁（『高僧和讃』曇鸞讚、三二首）
- 54 『註釈版』五九五頁（『高僧和讃』源信讚、九五首）
- 55 『註釈版』六〇六頁（『正像末和讃』三時讚、三六首）

- 56 『註釈版』六〇六頁（『正像末和讃』三時讃、三七首）
- 57 『註釈版』三六二頁、『七祖篇（註釈版）』一六二頁
- 58 『註釈版』一五四頁、一九七頁、三六一頁『七祖篇（註釈版）』三一頁
- 59 『註釈版』二二九頁、『七祖篇（註釈版）』九五六頁、九五七頁
- 60 『註釈版』一八二頁
- 61 北塔光昇『聖典セミナー』『高僧和讃』一〇一頁参照。
- 62 高木昭良『三帖和讃の意識と解説』三〇八頁参照。
- 63 『註釈版』五五七頁（『浄土和讃』讃阿弥陀仏偈和讃、五首）
- 64 『註釈版』五六七頁（『浄土和讃』大経讃、六〇首）
- 65 『註釈版』五九四頁（『高僧和讃』源信讃、九四首）
- 66 『註釈版』五九七頁（『高僧和讃』源空讃、一一〇首）
- 67 『註釈版』三六二頁、『七祖篇（註釈版）』一六一頁、一六二頁
- 68 『註釈版』二二頁
- 69 『七祖篇（註釈版）』一〇九六頁
- 70 『註釈版』五九五頁（『高僧和讃』源空讃、九九首）
- 71 第三章 第三節

まずは『浄土文類聚鈔』であるが、「心昏く識寡なきもの、敬ひてこの道を勉めよ。悪重く障多きもの、深くこの信を崇めよ。（『註釈版』四八四頁）」とあり、『教行信証』総序の御文（『註釈版』一三一頁）と比較してみると、確かに『浄土文類聚鈔』は『教行信証』の肝要が記されているといえる。この文章で示されているのは、阿弥陀仏の本願力によって賜った他力の信心が、一切衆生の煩惱によって妨げられるさとりへの道は無礙のはたらきによって障りを無くし、成就させるということである。これは本章第一節で取り上げた「無上正遍道」にも

繋がる内容である為深くは言及しないが、阿弥陀仏が整え一切衆生へと回し向けたこのさとりの道に敬いながら進み、本願他力の無礙の法門を深く信ずるべきであることが述べられている。

次に『愚禿鈔』では、「金剛の真心は、無礙の信海なりと、知るべし。（『註釈版』五〇七頁）」とあり、金剛の真心について親鸞は、「至心・信樂・欲生、その言異なりといへども、その意これ一つなり。なにをもつてのゆゑに、三心すでに疑蓋雜はることなし、ゆゑに真実の一心なり。これを金剛の真心と名づく。（『註釈版』二四五頁）」と定義しており、この文章で示されているのは、この金剛の真心を得た者は「無明煩惱」に邪魔をされることは無いまま阿弥陀仏から賜った他力の信心の無礙のはたらきによって往生へと導かれるということである。

次に『尊号真像銘文』では、天親の『浄土論』を解説した曇鸞の『往生論註』の一文を親鸞の言葉で表したもので、「無礙」といふはさはることなしとなり、さはることなしと申すは、衆生の煩惱悪業にさへられざるなり。（『註釈版』六五二頁）」とある。ここでは十字名号の本質を説いたもので、十方のいたるところまで救いを説き広める光の如来は、衆生が生まれながらにして持ち合わせている煩惱やその煩惱によって発生した悪業にさえぎられることがないということである。これは、「正信念仏偈」にも「攝取心光常照護 已能雖破无明闇 貪愛瞋憎之雲霧 常覆眞實信心天 譬如日光覆雲霧 雲霧之下明無闇（『浄真全』二、六一頁・再掲）」と記されているように阿弥陀仏の光明は私たち衆生の煩惱をもとせせず、すでにこの身に至り届いているということである。また、『尊号真像銘文』の続きには「正信念仏偈」の解説が施されており、「攝取心光常照護 已能雖破无明闇」について、信心を得た人は無明の闇がはれ、夜が明けかけようとしているということ。「貪愛瞋憎之雲霧

常覆真實信心天」について、我々の煩惱を雲や霧に譬え、常に存在しているということ。「譬如日月覆雲霧 雲霧之下明無聞」について、太陽や月は雲や霧に隠れるが、聞がはれて雲や霧の下が明らかになるように、阿弥陀仏の救済は往生に障りが無い。ということが親鸞の言葉で表されている。（『註釈版』六七二頁～六七三頁）

次に、『一念多念文意』では以下の様に記されている。

本願一乘円融無礙真實功德大宝海にをしへすすめ入れたまふがゆゑに、よろづの自力の善業をば、方便の門と申すなり。：無礙と申すは、煩惱悪業にさへられず、やぶられぬをいふなり。：宝海と申すは、よろづの衆生をきはらず、さはりなくへだてず、みちびきたまふを、大海の水のへだてなきにたとへたまへるなり。

（『註釈版』六九〇頁）

ここでは、「浄土三部経」に説かれる往生の内容についてのもので、阿弥陀仏の本願他力の法門について分割した解釈を施している文章であるが、阿弥陀仏の救済という功德の宝海は本章第一節で述べた「私たち衆生が勝手に決めた分別」というのは阿弥陀仏の救済にとって何の妨げにもならないという無礙が記されている。様々な種類の衆生を嫌わず、障害なく、分けずに往生へと導いてくださるという状態が衆生への一切平等の精神を表わし、その精神をもとに摂取して捨てることがないというのが分別への無礙と言える。

次に『唯信鈔文意』では、

「罪根深」といふは、十悪・五逆の悪人、謗法・闡提の罪人、おほよそ善根すくなきもの、悪業おほきもの、善心あさきもの、悪心ふかきもの、かやうのあさましきさまさまの罪ふかきひとを「深」といふ、ふかしといふことばなり。すべてよきひと、あしきひと、たふときひと、いやしきひとを、無礙光仏の御ちかひにはきらはずえらばれずこれをみちびきたまふをさきとしむねとするなり。

(『註釈版』七〇六頁〜七〇七頁・再掲)

ここは本章第一節の玉木氏が述べていたように、「弥陀の救いは一切の悪業煩惱に妨げられることなく、その救いが完徹することを「無礙」とした具体例を挙げられた部分で、仏教や人道上の悪い行いや考えによって往生から外されるということは無く、悪い人や尊い人、身分が低い人などをえらばずに救って下さるといのが分別を超えた救済として無礙のはたらきがあるといえる。

また、『弥陀如来名号徳』にも、以下の様に記されている。

阿弥陀仏は智慧のひかりにておはしますなり。このひかりを無礙光仏と申すなり。無礙光と申すゆゑは、十方一切有情の悪業煩惱のところにさへられずへだてなきゆゑに、無礙とは申すなり。

(『註釈版』七三〇頁)

ここでも、『唯信鈔文意』に記されているように十方のすべての生きとし生ける者の悪業煩惱に妨げられることがないということを無礙としている。

以上、『浄土文類聚鈔』『愚禿鈔』『尊号真像銘文』『一念多念文意』『唯信鈔文意』『弥陀如来名号徳』を用いて親鸞の無礙への解釈を見た。それらを総括すると、ほぼすべての典籍に対して「悪業煩惱にさへられず」と共通していることから、先にも挙げた『唯信鈔文意』のような救われざる者であってもその障害を通り抜けて救済の手を差し伸べていることが分かる。

資料

著者	典籍名	無礙を含む単語	『教行信証』への引用箇所	使用の割合
曇鸞	『仏説無量寿経』	7個	3箇所	42%
	『仏説觀無量寿経』	—	—	—
	『仏説阿彌陀経』	—	—	—
龍樹	『十住毘婆沙論(易)』	—	—	—
天親	『浄土論』	3個	1箇所	33%
曇鸞	『往生論註』	20個	12箇所	60%
	『讃阿彌陀仏偈』	4個	3箇所	75%
道綽	『安樂集』	6個	1箇所	16%
	『觀経疏』	7個	1箇所	14%
善導	『法事讃』	1個	0箇所	0%
	『観念法門』	—	—	—
	『往生礼讃』	3個	0箇所	0%
	『般若讃』	—	—	—
源信	『往生要集』	16個	0箇所	0%
源空	『選択集』	1個	0箇所	0%
	『教行信証』	45個		
親鸞		45個中24個は七祖以外の引用もしくは御自釈		

※佐々木調査(2025/10/27調査)

参考文献

〈書籍〉

- ・高原覚証『歎異抄集記』永田文昌堂、一九七三年
- ・星野元豊『講解『教行信証』』教行の巻 補遺篇、法蔵館、一九七七年
- ・中村元・福永光司・田村芳郎・今野遠『岩波仏教辞典』第二版、岩波書店、一九九一年
- ・岡亮二『『教行信証』口述五〇講 親鸞のころをたずねて』第一巻 教・行の巻、教育新潮社、一九九三年
- ・高木昭良『三帖和讃の意識と解説』永田文昌堂、一九九六年
- ・北塔光昇『聖典セミナー「三帖和讃Ⅱ 高僧和讃」』本願寺出版社、二〇〇九年
- ・悌實圓『聖典セミナー『教行信証』教行の巻』本願寺出版社、二〇一一年
- ・黒田覚忍『聖典セミナー 浄土和讃』本願寺出版社、二〇一四年
- ・浄土真宗本願寺派総合研究所教学伝道研究室〈聖典編纂担当〉『浄土真宗聖典―註釈版第二版―』本願寺出版社、二〇一九年
- ・浄土真宗本願寺派総合研究所教学伝道研究室〈聖典編纂担当〉『浄土真宗聖典全書』一 三経七祖篇、本願寺出版社、二〇一九年
- ・浄土真宗本願寺派総合研究所教学伝道研究室〈聖典編纂担当〉『浄土真宗聖典全書』二 宗祖篇上、本願寺出版社、二〇二〇年

・浄土真宗本願寺派総合研究所教学伝道研究室〈聖典編纂担当〉『浄土真宗聖典 七祖篇―註釈版―』本願寺出版社、二〇二二年

〈論文〉

・若林信受「阿耨多羅三藐三菩提について」『真宗研究…真宗連合学会研究紀要』二六号、真宗連合学会、一九八二年

・瀧弘信「大行とその源泉―「行巻」他力積の考察―」『大谷学報』七九号、大谷学会、二〇〇〇年

・玉木興慈「親鸞思想における無礙の意味」『真宗学』一一四号、龍谷大学真宗学会、二〇〇六年

・玉木興慈「教行信証」行巻の行―称名破満積を中心に―」『龍谷大学論集』四七四・四七五合併号、龍谷学会、二〇一〇年

・内藤知康「行文類」称名破満積の解釈について」『龍谷大学論集』四七九号、龍谷学会、二〇一二年

・藤嶽明信「他力と言うは本願力なり」『大谷大学研究年報』七一号、大谷学会、二〇一九年

・三明智明「親鸞の『教行信証』における誓願―一仏乗の開顕―その経文証『涅槃経』・『華嚴経』の文についての一考察―」『九州大学研究紀要』四七号、九州大谷学会、二〇二一年

参考サイト

-
- ・浄土真宗聖典・浄土真宗本願寺派総合研究所 https://j-soken.jp/category/download/download_3
 - ・歎異鈔集記（中巻） 高原覺正著 https://tannisho.a.la9.jp/Jikki_Cyu/9_8.html